



Mt. TAKAO ALONE

ひとり
高尾山

masaki



elcabooks

ひとり高尾山

ひとり高尾山

俺はこの際「ひとり高尾山」という言葉を一つの慣用句として日本語に登録してもらいたいと思っている。そして、辞典には次のように記載されることになるのだ。

【ひとり高尾山】なんとも居心地の悪い心持ちの状況を指し示し、いつも首を傾けたような不完全燃焼の非納得感がつきまとう状態。孤独感からくる虚しさと共にくだらない笑みを唇の脇にたたえ、達成感よりも敗北感から生じる闘争心をかき立てられる状況のことをいう。

俺は今、『高尾山口駅』行きの京王線特急に揺られている。

都心から離れるにつれて車窓から見える景色は柔らかな太陽の光に包まれた穏やかな緑色の世界に変わっていく。車内に目を移せば、リュックを背負った家族連れやカップル達がひしめき合っている。世の中にはこれだけ沢山の登山愛好家がいたのかと驚いたのも束の間、今日は五月のゴールデンウィークの間ただ中。無理もないといえは無理もない。

何を思ってみんなは高尾山に集まってくるのだろうか？

少し邪悪な思考回路が俺の脳内に広がって行くのを感じた。

新緑の香り高き季節に、胸一杯にそれを吸い込んでやろうという腹づもりなのか。愛しい彼女とのコミュニケーションを兼ねて、自然に優しい爽やかな男を演出しようとしているのか。

「・・・！」

ちょっと待ってくれ、そんなことを考えるのはくだらない。くだらないじゃないか！と自分を戒める。考えてるレベルが小せえよ。寂しい男はお前だよ。

そう、俺。だって俺、ひとりじゃん。

この時期、高尾山にひとり身で乗り込もうとする俺の姿はものすごく哀れなもんだ。自分で足を運んでおきながら、それでいて勝手にひがんでいるのだ。

それでも、この明るい陽射しがそんな荒んだ心を溶かしてくれるような気がしないでもなかった。

それにしてもなんで来ようと思ったのか。突然の衝動だった。

「高尾山行ってみっか」

全てはそこから始まった。人の思考というものは、時として論理的発想に基づかない所から突如として湧き出ることがある。それに行動が伴ったとき、「あの人、ヤバイんじゃない？」と後ろ指を指されがちになる。それは春先に桜の花が咲き乱れている頃、枝ではなく木の幹から直接開花している花の唐突さに似ている。

昨日の酒が残っていたわけじゃない・・・。

高尾山口駅に到着すると、まるで東京ディズニーランドがある舞浜駅のように老若男女の人でごった返していた。

「さあて俺も魔法にかかってしまおうか」

なんてやる気を出してみたりするけれど、ここは決して表情の変わらない巨大なネズミのキャラクターが出てくる魔法の国なんかではない。日本でも一番といってもいい位の生物多様性に富んだ現実の大自然なのだ。

そして同時に俺は高尾山の人気を再認識せざるおえなかった。

上に登って行くにはリフトなどという便利な乗り物があるが、そこにも長蛇の列が出来ていた。その光景にウンザリしてしまった俺は渋々歩いて山頂を目指さなければならなかったが、あんな列にひとりで並ぶよりは遥かにましだ。

「たまにはいいじゃない。普段運動不足なんだから、た〜んと歩きなさいよ」と、俺の中の誰かが言った。誰だ！

俺が「高尾山を若干ナメていたかもしれない」と思い始めたのは三十分程歩き始めてからだ。思ったよりも傾斜がキツく、なまった体からはたちまち汗が吹出してくる。

そんな俺のすぐ横を緑のノースリーブのシャツを着た女の子が通り過ぎてゆく。ニョッキリとむき出しになった二の腕はムッチリと極めて健康的だった。そしてそれを追いかける彼氏。

「ハア、はあ、はあ」

二人で呼吸を荒げながら、波長を同調させる感じはなんともエロチックだ。

そんなことを登山中に考えてしまう俺の頭はおかしいのではないか？

でもたぶん、人でごった返す暖かなゴールデンウィークの休日にひとりでこんな所に来ていてノースリーブでうっすらと「うなじ」と脇の下に汗をかいた女の子を見つけたら、五人中三人の男は変なことを考えるに決まってる。

へ！？「決まってる」だって？

そんなことは断言できない。

俺は何かに飢えているのだろうか？

そうだ、喉が乾いていたんだ……。

途中には何ヶ所か休憩するエリアがあって、飲み物や食べ物を購入することが出来る。

ビールが飲みたい。

でもなぜだかビールを飲むのには抵抗があった。この人混みのどこでどんな顔をして飲めばいいんだっていう問題。こんな俺でも大自然の中で健康的なピクニックに囲まれてしまえばアルコールを摂取することが不謹慎なんじゃないかと思ってしまうのだ。すれ違うのもやっとの空間で、そんな俺の「至福のまったりビールスペース」はどこにもなかった。

そんな喉の乾きを感じながら視界を移せば、景色の良い丘の上で老夫婦がレジャーシートを広げていた。キラキラと銀色に輝く魔法瓶から注いだばかりのお茶がやんわりと湯気をたてていた。

小さく並んで座るその二人の姿はとても微笑ましく見えた。

「たぶんムッチャ喧嘩しながら子育てして生きてきたんだろうなあ」と、自分の親のファイティ

ングシーンを想像してみたりする。その結果こんなに仲良くいられるっていうのはこの上ない幸せのように俺の眼には映った。

喧嘩して喧嘩しまくっても一緒にいるという関係は、「愛」以外の何ものでもないだろう。愛にも種類はいっぱいあると思うけれど、その中でも一番堅くて頂上の方にあるやつだ。

俺はまだやわらかくて山のふもとのりんごの樹にぶらさがっているような「愛」しか知らないのかもしれない。

まあそれも甘くておいしいのだけれど・・・。

俺はなんとなく山頂を目指していた。人で混んでいるとはいえ、木々の間から時折見える景色は美しく空気はうまかった。

「ほら、沢山いい空気吸っときなさい」と母親に言われて大きく胸をふくらます少年の一生懸命な顔がかわいらしく見えるが、俺はその光景に眼を細めるなどということを今はしない。普段仕事やなんかで偽善者な分、一人でいる時は無感情でありたいと装ってしまうが、こう考えている時点でそれは成しえていないといえよう。

それにしても山登りはいい。歩いている間は無心になれるし「山頂を目指す」という目的がある。必然的に歩かなければならず、意志の弱いダイエット志願者にはうってつけのエクササイズだということをテレビの中の誰かが言っていた。

やっぱり目的があれば人は登ってゆけるんだと思う。その根底に流れるのは人の意志であるということを見ると、山における「目的」に限らず人生における「目的」にも通じるものがあるように思う。目的や夢を持っているということは幸せなことだ。だってそこに歩いてゆけるんだから。きっと辛い山道でも耐えられるんだと思う。

そう考えると俺の夢はまだ霧に包まれていてただ漠然と太陽の光の射す方に向かって歩いているだけだ。まだ明確に見え切っていない。しかも時々ぬかるみに足を突っ込んだり、つまづいて転びそうになったりするんだからたちが悪い。でもそれでいいのだと思う。全てが明確に見え過ぎてしまったらそれはそれでつまらないものかもしれない。ただ単純に目の前に山道があるから俺達は登って行かなければならないのだ。でも確実に山頂に繋がっている道なんだ。そしてその道は一つとは限らない。人生の山頂は「幸せ」のある所。

そうこうしている内に、俺はだだっ広い広場みたいなエリアに踊り出た。むろん溢れんばかりの人、人、人。

ここはどの辺なんだろうと地図を見ても現在位置を指し示しているものが見付からない。どうしたものかとウロウロしていると、どこからともなく山頂に着いたどうのこうのという会話が耳に入ってきた。

ひょっとしてここは山頂なのか？

山頂の確認をうやむやにしたまま下山することは出来ないので、俺は必死になって山頂の標識を探した。山頂なら必ずある標識だ。

散々探し回ってやっと「山頂の標識」を発見した。その瞬間心の中にあった落ち着きのない不安感がおさまっていくのが分かった。

おかしいものだ。

誰が「ここは山頂です」と決めたのか知らないがそれを確認しないと安心しない自分がいた。

人が安心や達成を得られるとき、そこには形としての証拠および誰かの評価が必要なのかもしれない。人が一人でいると不安に思うのはそこにあるのかもしれない。資格やテストの点数、さらに認定証が欲しいと思ったりするのはそこにあるのかもしれない。そう考えると最初に「ここは山頂です」と決めた人はなかなか勇気のある人だ。それって「もうこれ以上は行けない」ってところまで自分を追い込んだ人にしか出来ない。でも下手をするとそれは自分で限界を悟ってしまうということにもなりかねない。

ただ、そんな硬い事言わずに「最高にうまい空気があって最高に美しい景色が見ればそこが山頂であろうとなかろうといいじゃないか。それで幸せじゃないか」って考え方もありかもしれない。

山頂って言葉に縛られない考え方。

山頂に「幸せ」があるんじゃないで「幸せのあるところ」が山頂。山頂に「達成」があるんじゃないで「達成のあるところ」が山頂。

まあ、それはそれで「そんなこと自分に甘い奴の考え方だよ」って誰かに言われてしまうかもしれないけれど。

下りは別のルートを利用することにした。その時始めて知ったのだが、山道には何通りかのルートがあったのだ。それぞれに特徴があるので、自分に合った道を選べばいい。

帰り道は「いかにも山道です」といった道で、人も少なかった。自分の求めていた道はこういうささやかな、それでいてワイルドな道だったのだ。樹の根っこに躓いて転びそうになったりすると思わずニヤケてしまうがその心の裏側には寂しさが伴うことも否めない。

やっどのおもいで下山すると俺は腹が減っていたので、蕎麦屋に入ることにした。

汚い蕎麦屋だった。

席に座ると奥の方からヨタヨタと喉がガラガラにしわがれた腰の曲がったおばあさんが出てきて「いらっしやい」と言う。

「もう、今日は御飯ものは終っちゃったんだよ。ごめんなさいね」

「他に何かあるの？」

「とろろそばに山菜そばとか」

「とろろそばください」

実は入る前からとろろそばを食うことを決めていた。意味もなく、高尾山で食う蕎麦は「とろろそば」でないといけなような気がしていた。

出てきたとろろそばは店の汚さとは反比例した旨さだった。

堅く粘り気のあるとろろは口に流し込むというよりも、噛んで食べるといった趣きだ。

「バァちゃんこのとろろは本物だからねえ。他の所のもんとはちよっと違うよ」

少し自慢げに話すそのおばあさんは、曲がった腰に鞭打って背筋を伸ばし、垂れ下がった乳を大きく膨らませたように見えた。

最後に温かいお茶を飲みながら「ひとり高尾山」について考えてみた。

「もう、こんな所来るものか！」

なんて思いつつも、次は誰かさんと一緒に来たいなあと必死に思ってしまう俺がいた。
「ふたり高尾山」「さんにん高尾山」「よにん高尾山」・・・。
俺は必ず戻ってくると思う。
「おばあちゃん、どうもごちそうさま。とろろそばおいしかったよ」
「そうだろう。あたしのじいちゃんが山で採ってくるんだよ。このとろろそばはここでしか食べられないからね。またいらっしゃいね。がはははは！」
「あたしのじいちゃん」っていう言葉が温かかった。そこにある「所有」の言葉には愛が見えた。
。これもとびきり堅くて頂上の方にあるやつ。

店の中におばあちゃんのガラガラの笑い声が響いた。

訂正、慣用句辞典。

【ひとり高尾山】なんとも居心地の悪い心持ちの状況を指し示し、いつも首を傾けたような不完全燃焼の非納得感がつきまとう状態。孤独感からくる虚しさと共にくだらない笑みを唇の脇にたたえ、達成感よりも敗北感から生じる闘争心をかき立てられる状況のことをいうが、最後には心が温かさで満たされる前向きで安らかな精神状態になることをいう。

あとがき

最後までお読みいただきましてどうもありがとうございました。
elcabooksでは紀行文を始めとした様々な「熱い」書籍の制作を行っております。常識化した日本の価値観に疑問を持ちながら日々「幸せの形」を模索しています。忙しさの中で見落としがちな日常や当たり前の生活の中に心を傾けるべき大切な何かがあるような気がしています。生活や旅や物事との触れ合いの中で引っ掛かった何かを表現出来ればいいなと思っています。そしてそれらは温かくもあり冷たいものでもあると思います。
ホームページでは文章を始めとして絵画等の表現活動を掲載しております。ご興味ございましたらお暇な時にでも遊びに来ていただけますと幸いです！

e l c a (elements of creative atmosphere) WEB SITE
<http://www.elcaworld.com>

ご意見やご感想等ございましたらお気軽にご連絡ください。
email: elcamail★yahoo.co.jp (←★の部分を実際にご送付ください)

masaki (zonox)